年,徳島県告示第47号)と称されている。今期のはじめ昭和元年の組織は,種芸部,化学部,菌虫部,園芸部の 4部からなり庶務係と会計係とで構成されていた。それまで行ってきた養鶏事業は園芸部に属しており昭和2 年度の種卵配布を最後に廃止し,新たに畜産振興のために設立された種畜場に昭和4年1月(種畜場開場 式昭和4年9月5日)に移管した。昭和3年には、園芸作物の奨励、普及のために設置された園芸指導地な らびに試験地(大正14年に設置)のうち試験地を残して指導地を廃止した。 昭和8年(1933)には、果樹栽培の振興に対応して温州ミカンを中心にした栽培試験を実施するために勝浦 郡生比奈村に柑橘栽培試験地を設置した。昭和13年には本場を改築し那賀郡富岡町領家字野神に富岡 試験地を,三好郡池田町新山には池田試験地を設置した(昭和13年,公示第329号)。 昭和17年(1942)には,富岡試験地,池田試験地をそれぞれ富岡分場,池田分場に改称し(昭和17年,告示 第213号)、このように組織機構は変わってきた。研究体制については昭和13年(1938)の庁舎改築を機会に 試験地を設置したことにより前期に比較して地域的対応をしつつ整備充実がはかられてきた。 農業指導者の養成機関の変遷については昭和2年(1927)には、それまで徳島県農会の委託により農業技 術員の養成を行っていたがこれを中止し当場に徳島県農業技術員養成所を併設した(昭和2年 県令第26 号)。 昭和 13 年(1938)には,徳島県農業技術養成所を徳島県農会技術員養成所に改称することになったが(徳島 県令第26号),5年後の18年(1943)には再び徳島県立農業技術員養成所と改称した(徳島県令第44号)。な お技術員養成所の外に,徳島県立農事試験場練習生規定が定められ昭和6年(1931)から練習生を養成し ている,技術員の指導体制については,名称変更を伴いながらも継続して行われ,また精農家育成のための練 習生受入体制が確立し増産体制に対応して変遷してきた。 なお改築前の本場の施設および建物配置図は、つぎのとおりである。 ① 事務室(本館) 38.9坪 ① 作業室 10.7坪 08 馬 小 屋 ② 物 置 12.0坪 4.2坪

1.6坪

創設以来,数回に及ぶ機構改革を経てきているが,今期は全期間を通じて徳島県立農事試験場(明治41

第2節 組織・機構・施設(諸規定など)

36.5坪

17.1坪

1.組織・機構の変遷

園 芸

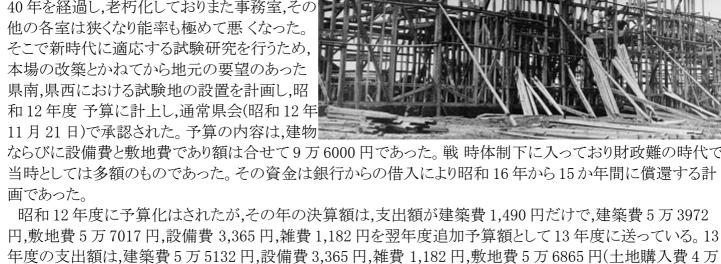
原種圃作業室

室

3

40.7坪 火力乾燥室 12.1坪 (9) 小麦係室 (8) 28.8坪 ⑨ 物 10.0坪 堆肥 小屋 13.2坪 0 ベタリア瓢虫飼育室 10.1坪 ガス発生室 1.8坪 13 化学 27.9坪 (3) (14) 作 29.4坪 03 (15) 室 28.7坪 4 肥料物置 18.5坪 9 **(5)** Ø 14 (B) 6 15 Œ 第2図 建物圃場配置図 名東郡加茂名町大字東名東村字戸尻(昭和11年4月)

49 石油タンク(油庫)



土地面積 5町1反5畝部 建物敷地 1町 圃 場 4町1反5畝 水田 3町2反 畑 8 反 果樹園 1反5畝

宿直室及物置 32坪5合 **a** 庫 6坪(延12坪) 具 室 38坪5合 農 油 庫 1坪 石 夫 舎 16坪 農 厩 舎 15坪

肥 舎 20坪 廊 下便所其他 125坪75合

ベタリア飄虫飼育室 12坪5合

温 室 62 坪

圃場の内訳

其

建物

種芸試験地 2町6反

菌虫試験地 1反5畝 化学試験地 2反5畝 果樹園 1反5畝 他 1反3畝

小麦奨励品種決定試験地 3 反 水稲原種圃3反 小麦原種圃1町1反 蔬菜 園 3 反 7 畝 蘿 葡 品 種 改良試験地 5 反

建物敷地 2反 場 1町6反5畝 水田 2反7畝 畑 1町3反7畝15 普通作物圃 1町 特用作物圃 2反 果樹園其の他 1反7畝15 借地 畑,清酒甘藷試験地 3 反 畑,玉蜀黍試験地 3 反歩(内1 反借地)

鮎喰川畔に近代史を誇る 県農事試験場落成式 40また7年以前の建物と設備で今日の県下八万の農家を指導開発は不適当であると,県農事試験場は前

(\*生徒用の寄宿舎として利用していたが後に火災により焼失)

る技師1名と、果樹担当の技手1名の2名であったが12年にはダイコン、スイカを担当する助手1名が加わ り,さらに昭和12年から17年まで兼務として技師が配属されていた。なお昭和19年には技師2名(地方農林 技師1名と技手から昇格した県技師)と助手1名であった。この間の園芸部は蔬菜(キュウリ,ナス,カボチャ, ジャガイモ,ベツ,一寸ソラマメ,スイカ,ダイコン)と果樹 (ナシ,温州ミカン)を対象としていた。業務の内容には 試験としてはこれらの品種,育種,栽培法に関するものがあり,他にダイコン,サツマイモの原種生産と配布およ び梅苗木養成配布を含む種苗配布があった。 化学部では昭和2年までは場長が兼務し、3年からは農林技手1名が加わり2名で実施していた。技手1 名の期間もあったが12年から助手が2名加わった(国の補助職員)。兼務職員が昭和12年から14年までは

2名,15年から17年まで1名いたが昭和14年からは技手1名と助手2~4名が担当していた。この間には 特に合理的施肥法樹立のための施肥標準調査事業が昭和12年から13か年計画で開始されこのため昭和

菌虫部は主任として技手が1名であったが、昭和11年から17年まで助手が1名加わった。さらに昭和17 年から技手が1名加わり3名になったが,18年から助手がいなくなり技手2名となった。昭和16年から食糧 増産の一環として病害虫発生未然防止の必要性から病害虫発生予察事業が発足し、これに伴い観察 地点

12年からは施肥標準調査,16年から施肥基準担当者に分かれていた。

(業務委嘱)6か所を設けた。

昭和時代 | 1

事務

技能

計

研究

事務

本

場

池

田

試

験

地

講 習

所

計

\*3月31日在職者数

4.改変された組織 (1)養鶏事業の移管

設置を機に新な試験を開始した。

技能

計

研究

事務

2

1

4

| 5 || 6

|| 1 || 1

3

1 1 7 |

1

8

1 1 1

分 1 技能 場 2 2 2 3 4 3 計 2 2 1 2 2 3 2 1 3 1 富 研究 尚 事務 分 1 技能 場 3 1 1 2 2 2 3 2 計 研究 柑 橘 事務

を機会に昭和3年からは養鶏事業は種畜場に移管した。 (2)園芸指導地の廃止と試験地 園芸作物の栽培奨励普及を図るため,試験地と共に大正14年から設置し,各種野菜の栽培展示と技術指 導をはかり本県の副業振興と特産品の生産指導の役割をはたしていたが昭和3年を最後にとりやめた。な お,その後の試験地としては,宍喰の野菜促成栽培は,大正14年~昭和8年,筍の早期採取は大正14年~ 昭和9年,柑橘の肥料試験石灰加用は大正14年~昭和6年,ナシの肥料試験は大正14年~昭和4年の間 行った。昭和5年以降試験地を委託試験地と改称している。また委託試験の中でも昭和5~8年まで温床醸 熟材料比較試験昭和7~8年までスイカ肥料試験が加わっている。大正14年から継続または引継がれた委

託試験はタケノコを除いて終了し,タケノコのみ昭和9年で終了した。ただし果樹については,昭和3年の担当

今期は、大正末期に始まる世界的大恐慌で農村不況の波にのまれた。国は農村恐慌の対策として昭和2年 から鶏卵増産計画をたて養鶏奨励を出し畜産振興を行った。本県では、昭和3年通常県会で種畜場設立を

当場では、それまで種卵の配布を行っており、昭和元年に816個、昭和2年に505個の配布を行ったが、これ

議決している(昭和4年1月11日に県庁内に事務所を設置し,業務を開始し同9月5日に開場)。

昭和4年からは、本場では果樹品種試験を実施し、ナシ、アンズ、ブドウ、クリ、カキを供出していたが、当時、柑橘 は栽培適地である勝浦郡横瀬町,生比奈 村で委託試験として実施していた。委託試験は昭和6年まで4課 題を実施しており、昭和7年から新規課題をあげていたが同年の県会で試験地設立が決議され圃場の変更 を余儀なくされたため中止している。 県会における試験地設置の決議内容によると柑橘は逐年発達し年産額50万円をこえており、山村地方に 於ける有望作目で県外にも移出しており,他県産の優 良種に圧迫される可能性がある。現在の委託試験は

(4) 富岡試験地と池田試験地の設置 本場が吉野川流域地帯に位置するのに対し,県南,県北への地域的対応が必要となり,富岡町と池田町に試 験地を設置した。当時は戦時体制にはいった直後であり副業の振興,食糧増産の任務が農事試験場に課せ られていた。富岡試験地は県南地方に適する作物の栽培試験を目的に設置された。すなわち、那賀川流域 以南の地帯は温暖多雨で、地力の消耗が甚だしく、加えて毎年台風その他の災害を授ける等吉野川流域地 帯と異なるので県南地方を対象とした米、麦の品種改良ならびに栽培方法に関する試験を実施して、農業生 産力を高めるとともに、農業経営の改善に資するためであり、合せて水稲、裸麦の原種栽培も実施することにし

池田試験地は県北方の栽培試験を目的に設置された。設立直後から陸稲,サツマイモ,トウモロコシ,大豆の 栽培試験,トウモロコシ,大豆の原種生産と本県山間および中山間地帯における水稲奨励品種選定のための 品種比較試験を実施するようにした。その後,茶,ハッカ,コンニャク,除虫菊,ワタ,山間地の適作物選定のため

2.土地・施設の状況 (1)本 場 本場改築と用地の県有化の経過 当時の建物は,明治 26 年(1893)に設立され たもので農商務省農事試験場四国支場が同 36年に廃止された当時に、設備も含めて譲り受 け県の農事試験 場としたものである。その後 二,三の増築したものを除いて当時の建物は 40年を経過し、老朽化しておりまた事務室、その 他の各室は狭くなり能率も極めて悪くなった。 そこで新時代に適応する試験研究を行うため, 本場の改築とかねてから地元の要望のあった 県南,県西における試験地の設置を計画し,昭 和12年度予算に計上し,通常県会(昭和12年 11月21日)で承認された。予算の内容は,建物 ならびに設備費と敷地費であり額は合せて9万6000円であった。戦時体制下に入っており財政難の時代で 当時としては多額のものであった。その資金は銀行からの借入により昭和16年から15か年間に償還する計 昭和12年度に予算化はされたが、その年の決算額は、支出額が建築費1,490円だけで、建築費5万3972

本館は当時の場長野坂象之氏が前に勤務していた香川県農事試験場(昭和5年移転改築)を参考に設計 したものであるといわれている。そして昭和14年4月13日講堂で約350名の出席のもとに落成式が盛大に 挙行された。引続き落成式を記念して優良農具展,農作物試験成績品展が13・14 日の両日行われた。 1939年4月の改築記念農事試験場一覧によれば面積,建物は次のとおりである

8999円,敷地費7,866円)で12年度分を合せて総経費11万8035円を費した。





本	館	120 坪(	延 155 坪	<u>=</u> )			
講議室兼参	観人	空室	50坪				
化 学	室	47 坪					
園芸作業室	及農	夫室					
その	他	55坪					
小麦納舎	兼作業	美室 2	8 坪				
憧 菽	字	4 採	5 合				

(2)試験地及び分場 ①富岡試験地(後分場) 総面積 1町7反 建物,敷地 2反 圃 場 1町5反 米麦原種圃 米1町2反

(麦1町)

敷地 20a,水田 27a,畑 140a は町からの寄附受けたものであった。

種芸試験地 3反

建 物 本 館 27坪 収 納 舎 24坪 倉庫及調査室 21坪 堆 肥 舎 15坪 職員住宅 25坪

②池田試験地(後分場)

総面績 2町5反

畑,玉蜀 5 畝 館 27坪 本 作業室兼収納舎 32坪 肥 舎 12坪

甘藷収納舎 12坪 計83坪

2 号 15坪 計32坪

職員住宅 2 棟 1 号 17坪

徳島毎日新聞は紙面で次のとおり報じている。 昭和14年4月14日 の野坂場長時代に計画,清水知事,工藤経済部長,森 岡農務課長の努力で4万8390円の総工費を投じ,地 方篤農家の援助で,近世式木造の時代建築と,設備が整えられた。これが落成式は4月の13日講堂で盛大 に挙行された。 釆賓として県市郡農会長,県議会議員,町村長会長,県の関係者,市会議員,日刊新聞記者,其他関係官民,

て開会する様である。

③ 生比奈柑橘栽培試験地の設置

土地 4反18歩, 建物敷地 1畝

寄附を受けたとあり、昭和8年に設立し、昭和9年に開園した。

○同 4月15日

3.職員数の動き 当期のはじめは,種芸部,化学部,菌虫部,園芸部,庶務会計から成り,昭和8年から柑橘試験地が,昭和13年 から富岡試験地(昭和17年から富岡分場に)と池田試験地(昭和17年から池田分場に)が加わりそれぞれに 担当をおいていた。 職員および担当の改変 場長は、地方農林技師で場長の外種芸部と園芸部に1名ずつの同技師がいて地方農林技師-農林技手 -助手で構成されていた。なお化学部と菌虫部は農林技手 と助手から成っていた。 昭和 17 年から地方農林 技師は地方技師に、農林技手は徳島県技手に変更したが、昭和19年には徳島県技手は徳島県技師に改称 された。庶務会計は昭和2年からは徳島県農林主事補が担当し昭和17年からは徳島県属に変わった。12 年からは助手が加わって従事していた。 なお各部に主任が昭和7年まではおかれていたが、昭和8年からは主任制を廃止している。

13日豪雨のため一時阻止されしも午後から晴れて14日多数の参観を呼んでいる。

協賛会長,工事請負人其他で350余名である。式次は森岡農務課長の開式の辞,宮城遥拝,皇軍将兵武運 長久祈願黙祷,修抜,献饌,河野斎主の祝詞次いで祭主知事,河野斎主,岸野県会議長,迫経済部長, 森岡農 務課長,中村土木課長,多田県農会長,工藤徳島市長,市会議長代表,佐野農事試験場長,吉田協賛会長,楠 工事請負人、玉串奉典に次いで撤饌昇神、清水知事、木村土木課長、来賓として岸野県会議長、工藤市長、多 田県農会協賛会長,吉田存一氏その他,諸氏の祝詞があって佐野農事試験場の閉式の挨拶で滞りなく式を 終った。引き続き、同講堂で試験場に関係のある県下各方面の結合である改築落成祝賀協賛会の祝賀宴を 開かれた。吉田協賛会長の挨拶,岸野県会議長の謝辞,万歳三唱などあって午後二時頃散会した。当日は, 農具の展示会を開いて,一般の縦覧を求める計画であったが折柄の降雨で沙汰止となった。 何れ日を 定め

勝浦町前史によると,昭和8年柑橘試験地の用地として,三溪字栗城の水田3反歩(29.8a)および事務所,物 置,作業場の敷地として5坪(16.5 m²)を町から県に寄附を受け地元の武田繁太郎氏他13名から1,050円の

種芸部は、地方農林技師が1名と、地方農林技手3名と助手1名でスタートした。それぞれ技手の役割は農 具係,原種係,育種係の3つの係に分担されていた。農具係は昭和13年まで,原種係と育種係は昭和7年ま であったが、その後原種圃が昭和8年から10年まで、米裸麦原種圃が昭和11年から12年まであり、小麦担 当が昭和8年から13年までと役割分担が変ってきている。助手は,種芸部として1名から3名程度いたが,昭 和16年から18年まで酒精甘藷担当がおかれ、昭和17年から水陸稲特殊実地指導がはじまり嘱託として1 名が従事していた。昭和14年以降になると助手の交代がひんぱんで3カ月から一年未満で職員が替って いる。この間の種芸部は育種部門の強化がみられ従来の稲麦,特作のほかに,ダイコン(2~11年),スイカ(9~ 11年)の新品種育成と採種事業を実施している。ダイコンとスイカについては昭和12年以降園芸部に引継 がれている。昭和13年に池田と富岡に試験地が設置されたため,陸稲と雑穀の試験および原種栽培は池田 に水稲と裸麦の原種生産は富岡試験地に移され,種芸部では水稲,麦類,特用作物の栽培部門を中心とし原 種は小麦だけとなった。農具係は従来どおり種芸部の担当であったが専門職員はおらず14年以降は実施 されていない。 園芸部は、昭和3年まで地方農林技師1名、農林技手1名と園芸 指導地担当の助手6名が いたが昭和3年の園芸指導地の廃止とともに担当職員の設置も廃止された。昭和4年からは蔬菜を担当す

富岡試験地は,設立された昭和13年から技手1名(12年まで種芸部助手),助手1名が配属された。その後 分場となった昭和17年からはさらに助手が1名加わった。業務の内容は水稲,裸麦と菜種の栽培や品種改 良に関する試験と水稲,裸麦の原種生産であった。 池田試験地は,昭和13年に技手と助手の2名が配属され,昭和18年と昭和19年には助手が1名づつ加 わった。業務の内容は水稲、裸麦、小麦、サツマイモ、陸稲、ジャガイモ、大豆、トウモロコシ、茶、ハッカ、コンニャク 等多品目にわたる栽培・品種改良試験と大豆,サツマイモ,トウモロコシの原種生産を担当していた。 庶務会計係は農林主事補1名であったが本場の改築と用地の県有化ならびに試験地の設立をひかえて昭 和12年から助手が1名加わり計2名となった。 技術員養成所における指導は場の職員が当っていたが徳島県立農業技術員養成所の時代において昭和 19年だけであるが、専任の嘱託を1名おいて運営に当っていた。

第2表 職員構成と員数

2

16 | 17 | 18 | 13 | 13 | 13 | 12 | 14 | 14 | 13 | 13 | 18(3) | 17(3) | 15(3) | 15(2) | 19(2) | 17(2) | 19 | 15 | 20

1

13

2

14

2

15

2

16

2

17

1

18 | 19 | 20

17 13 16

4 2

2

1

1

1

2 2 2

9 | 10 | 11

技能 1 計 21 | 20 | 19 2 2 2 1 | 1 | 1 | 1 | 1 |1 1 1 1 1 1 1 1 1 2 1 2 3 2 事務 合 5 技能

16 17 18 13 13 13 13 12 14 14 13 13 18(3) 20(3) 19(2) 19(2) 24(2) 21(2) 23 23 26

(3)生比奈柑橘試験地の設置 県は、大正末期から昭和にかけて園芸作物の栽培奨励をはかっている。この一環として園芸指導地と試験 地を大正14年から昭和3年にかけて設置し、その生産ならびに技術の普及の拠点とした。その試験地の中 で柑橘温州ミカン肥料試験は勝浦郡横瀬町三溪と生比奈村沼江に、ナシの肥料試験 は板野郡大津村大津 野に設置していた。

規模が小さいので今後栽培その他の試験研究を強化して,発達を図りたいと記述されている。設立に当って は生比奈村が候補地として上げられた。村ではすでに経済更正計画の中で果樹の振興を打ち出してクワか ら果樹への改植,柑橘の試験を行うなど,試験地設置には 積極的であった。県立の果樹試験地を誘致するた めには、地元から試験地3反、倉庫ノノノ、事務所の敷地を寄附しなければならないことをあげ村会で協議して

いる。結局,三溪栗地域の水田3反と事務所,物置,作業場の敷地5坪を町から県に寄附し,地元の14名の者 から試験地に要する経費として1,050円の寄附を受理している。 なお、昭和8年は開園準備の年となり昭和9年に開園し、4月から定植をはじめている。

の畑作物の栽培試験を加え県西部の農業技術の基幹として設置された。